

農村集落における住民の行為・認識からみた カワドの継承に関する研究 —新潟県古太田川周辺集落を対象として—

1X20D043-4 塩山祈*

農村集落において、生業の変化や近代的インフラ整備を背景として、生活や生業と密接に関わる風景が失われつつある。本研究では、水利用施設「カワド」が多く見られる新潟県古太田川周辺集落を対象として、水辺空間の利用の実態を把握し、水辺空間と地域住民との関係性を明らかにすることを目的とした。地域住民へのアンケート調査とインタビュー調査、現地調査を実施し、水辺空間の利用の実態とその変遷を把握した。またテキスト分析から、地域住民の、水辺空間への関心の低下が明らかになった。さらにカワドという場所は他者と共有され、多様な経験が蓄積するという性質が明らかになり、住民の川への認識の深化に寄与していることが示唆された。

Key Words : カワド, 生業, 水利用, 行為, 質的テキスト分析

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

農村集落では、生業や生活を支える重要なインフラとして河川をはじめとする自然環境が存在し、その土地に暮らす人々の生活や生業を通して、人々と環境との間に密接で多様な関係性が形成されていた。

しかし、生業の変化や近代的インフラ整備を背景に、地域の生活に密接に関わって成り立ってきた伝統的な風景が破壊される「風景の危機」が生じ¹⁾、かつて住民にとって多様で豊かな意味を持つ場所が、由来も知れない空間と交換可能な環境に置き換えられてしまっている。さらに、農村集落における人口減少によって、インフラの維持管理を担う主体は弱体化し、インフラの管理がますます困難になっている。このような社会的課題が顕在化する農村集落において、生活に密接に関わることで形成されてきた風景を保全・継承するためには、その地域の生活や生業、文化を把握し、地域に育まれてきた風景の実態を明らかにすることが必要である。

そうした中、長澤ら²⁾は、新潟県福島潟周辺地域を対象として、水路網と集落の変遷と特徴を明らかにした。水路との接続が特徴的な集落として、古太田川周辺集落を挙げている。この集落は、水路と平行に立地しており、現在でも水利用施設の「カワド」や井戸をはじめとした、水との伝統的な関わりが残

っている。

以上を踏まえ、本研究では水辺空間と住民との関係性の継承のための示唆を得ることを目的とする。そのために、住民と水路との関わりが特徴的な新潟県古太田川周辺集落を対象として、水辺空間の利用実態を把握する。さらに住民の「語り」から、住民の生活におけるカワドの特徴や位置づけと、地域住民の水辺空間に対する認識を明らかにする。

(2) 既存研究の整理と本研究の位置づけ

本研究に関連する既存研究として、生業と空間構成の関係を扱う研究がある。沢ら³⁾は、伊庭の水利用の実態と水路網構造の関係性を考察した。立川ら⁴⁾は、中山間地域の生業の変化に基づく、建物や樹林地を主体とした集落景観の変遷を明らかにした。また、山口ら⁵⁾は小鹿田焼の里を対象として、窯業の作業工程の変化と景観構成要素の変遷の関係を把握した。

これらに対し本研究は、住民の行為を通して形成された水辺空間と住民の関係を、住民の水辺空間への認識に着目して考察する点に特徴がある。

(3) 研究の方法と構成

本研究では、水辺空間における住民の行為と、住民の水辺空間に対する認識という2つの観点から、地域住民と水辺空間の関係を明らかにする。そのた

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部4年

めに、現地調査、地域住民を対象としたアンケート調査とインタビュー調査を行い、その結果を整理し水辺空間における行為を把握する。また、インタビュー調査で得られたテキストデータから水辺空間に対する認識を抽出する。さらに、水利用施設の中でもカワドに注目し、井戸とカワドに関する発言を対象としてテキスト分析を行い、カワドの特徴を井戸と比較して考察する。

(4) 対象地の選定理由

対象地は、福島潟周辺地域の中でも水路との接続が特徴的な集落に注目した。水利用施設「カワド」が多く現存し、水路を通じた地域住民と水との関わりが残っていると指摘されている²⁾ことから、住民の生活や生業と水辺空間との関係性が残されていると推察される。新潟県古太田川周辺の下興野・太田新田・飯島新田集落を選定した。

この地域では、2022年に高齢化による河川の維持管理の負担から、古太田川を歴史的遺構として保存するための陳情書が提出される⁹⁾など、古太田川の将来を考える機運が高まっていることが特筆される。

2. 古太田川周辺集落の概要

(1) 対象地の地勢と歴史

対象とする3集落は新発田市の西部に位置し、標高が周囲よりも3mあまり高い地域である(図-1)。古太田川は、全長約2km、川幅約2mの河川であり、太田川から下興野頭首工で分流し、集落に流れ込む。その後水田地帯を通過し福島潟に流入する。古太田川には、家庭で川の水を利用するための水利用施設「カワド」が各世帯により設置され、対象地には43個存在している(図-2)。

集落は下興野(成立年代不明)、太田新田(1655年成立)⁷⁾、飯島新田(1657年成立)⁷⁾⁸⁾の順に成立したと推定され、1959年に新発田市に編入され現在に至る。

(2) 対象地の人口と産業

2023年11月末現在の世帯数と人口は、下興野が58世帯183名、太田新田が26世帯91名、飯島新田が22世帯54名である⁹⁾。過去30年でいずれの集落においても世帯数に大きな増減は見られないが、下興野集落では人口が急減し、30年前から約3割減少している¹⁰⁾。

対象地周辺では昔から稲作が盛んで、1877年には対象集落のほぼ全ての世帯が農業を営んでいた⁸⁾。しかし時代とともに農業従事者の数は減少し、現在

では全ての対象集落で人口の1割以下である¹¹⁾。

(3) 対象地における景観・デザイン研究室の活動

対象地において2022年9月頃から早稲田大学景観・デザイン研究室では調査・研究活動を行っており、古太田川の実測調査から集落でのプレイスメイキングまで幅広い活動を実施している(表-1)。

3. 水辺空間の利用の実態

(1) 調査概要

本研究ではインタビュー調査、アンケート調査、現地調査を実施した。調査の概要を表-2に示す。はじめに、集落の生活の様子や水利用の実態を把握するために、2023年7月から9月にかけて住民を対象にインタビュー調査を行った。また、各世帯の「水神様」の認知度と実施状況、井戸の所有と利用の実態を把握することを目的として2023年9月に住民を対象にアンケート調査を実施した。さらに、集落仕事「江濠い」、年中行事「水神様」の実態把握のため、2023年7月、12月に現地調査を行った。

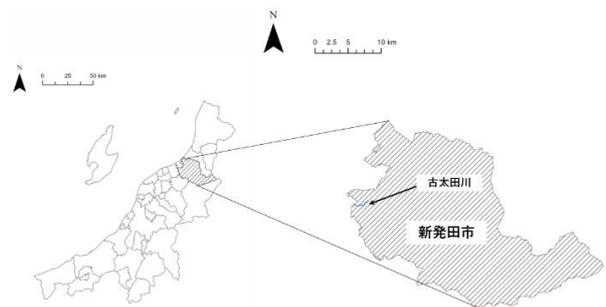


図-1 古太田川の位置

表-1 対象地における景観・デザイン研究室の活動

実施日時	活動内容
2022年9月	福島潟自然文化祭にて万十郎川に関する展示を行う
11月	地域住民へのヒアリング調査・古太田川の実測調査の実施
2023年2月	地域住民へのヒアリング調査の実施
5月	地域住民へのヒアリング調査の実施
6月	佐々木小学校4年生の授業に参加
6月	「古太田川のお話会」の開催
7月	佐々木小学校4年生の授業の見学
7月	「江濠い」に参加
7-9月	地域住民へのインタビュー調査の実施
9月	地域住民へのアンケート調査の実施
10月	新たなカワドの製作
10月	プレイスメイキング「かわばた滞在」の実施
10月	第二回「古太田川のお話会」の実施
10月	佐々木小学校4年生の授業に参加
12月	「水神様」の見学
12月	古太田川の水質検査の実施
2023年3月-	不定期で地域住民向けにニュースレターを発行

(2) インタビュー調査の結果

インタビュー調査によって得られた内容を、集落仕事・年中行事と、水辺空間における行為についてそれぞれ整理する。

a) 集落仕事・年中行事

対象地では、かつて多くの集落仕事や年中行事が行われ、「江浚い」や「水神様」など現在でも行われているものも存在する(表-3)。「道普請」は集落の市道のアスファルト舗装により、「味噌煮釜洗い」は、圃場整備により大豆を栽培する田んぼの畔が消滅したことにより行われなくなったと考えられる。

b) 水辺空間における行為

インタビュー調査の回答者のうち出身が下興野集落の住民を対象として、古太田川で行われてきた行為について、対象者の年代と対応させて整理した(表-4)。行為は「米をとぐ」「野菜を洗う」「鍋や釜を洗う」「飲料」「洗濯」「水汲み」「身支度」「農機具を洗う」「除雪」「泳ぐ」「いかだをつくる」「魚を捕る」「年中行事『水神様』」の全部で13種類の行為が抽出された(表-5)。

(3) アンケート調査の結果

アンケートは100部(下興野:50部,太田・飯島新田:50部)配布し、回収数は28部(下興野:22部,太田・飯島新田:6部)、回収率は28%であった。井戸の所有について、かつては多くの世帯が井戸を所有していたが、現在はほとんどの世帯が井戸を所有していない(図-3)。またアンケートの自由記述より、1960年代頃までの井戸の用途として、「飲用」、「風呂の水」が6件、「野菜を洗う」が4件、「食器を洗う」が3件、「洗濯」が2件であり、1960年代頃は井戸水は生活用水として広く利用されていたことが明らかになった。

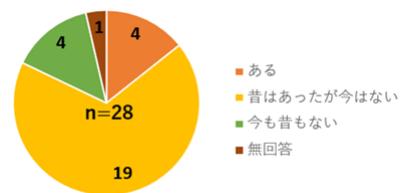


図-3 井戸の所有状況



図-2 対象地におけるカワドの位置とその様子

表-2 各調査の概要

	日程	方法	対象	調査内容
インタビュー調査	2023年7月~9月 (計8日間)	各住民宅を訪問	下興野集落在住の住民23名	カワドの利用、カワバタの利用、井戸の利用、集落の行事などの事実関係の確認
アンケート調査	2023年9月1日~9月24日	自治会長が配布 班長が回収、メールで送信	下興野の50世帯	回答者年代、「水神様」の認知度、「水神様」の実施状況、井戸の所有の有無、過去と現在の井戸の用途
		自治会長が配布 集会場に回収箱を設置、メールで送信	太田新田・飯島新田の50世帯	
現地調査	2023年7月30日	現地訪問	集落仕事「江浚い」	江浚いの様子の観察、作業内容の把握
	2023年12月15日	現地訪問	年中行事「水神様」を実施している1世帯	「水神様」の様子の観察、行事の実態の把握

表-3 集落仕事と年中行事

項目	名称	時期	現存する	内容
集落仕事	道普請	-	×	集落の道がアスファルトで舗装される前、道に砂利を敷き、整備する。
	江浚い	お盆前	○	古太田川の草刈りや木の伐採を行う。
	味噌煮釜洗い	-	×	集落センターの前で、婦人部が味噌を煮る釜を洗う。
年中行事	元旦	1月1日	○	家長が集落センターに集まり、新年のあいさつをする。 かつては男性のみが大晦日や元旦にかけて神社を訪れていた。
	小正月	1月15日付近	○	女性が神社にお参りに行き、まんじゅうを供える。
	賽の神	1月15日付近	×	正月飾りなどを焚き上げる。
	地藏様のお祭り	6月末頃	○	下興野集落の南側にある広場で、屋台などが集まりお祭りが開催される。
	盆踊り	お盆頃	×	下興野集落の南側にある広場で、櫓を建て、お囃子をして盆踊り（サイサイ踊り）をする。
	-	8月16日	○	白玉粉で作った団子を半分川に流す。
	運動会	-	×	集落対抗の運動会が行われる。
	針供養	12月8日	×	使えなくなった針を供養する。
	大黒様の嫁入り	12月9日	×	家内繁盛を願い、二又の大根（嫁大根）を神棚に供える。
	水神様	12月15日	○	カワドにお供え物を置き、水を使えることに感謝し、水難事故に遭わないよう祈願する。
田の神様	12月16日	×	一年豊作になるよう祈願する。	

表-4 古太田川における行為の一覧

回答者No.	回答者の年代	水利用								-	遊び			行事	
		飲料	米をとぐ	身支度	洗濯	水汲み	鍋や釜を洗う	野菜を洗う	農機具を洗う		除雪	泳ぐ	いかだをつくる		魚を捕る
No.2	80		○			○					○			○	○
No.3		○	○			○								○	○
No.5					○	○		○			○			○	
No.8	70		○	○		○	○		○	○				○	○
No.10					○		○		○	○				○	○
No.9												○		○	○
No.17	60		△			○				○			○	×	
No.22								○	○	○	×		○	×	
No.23					△	○					×			○	
No.11	50			△									○	×	
No.6	40										×	○	○	×	
No.13										○	×	○	○	×	
No.14										○	×	○	○	×	
No.16											○	○	○	×	
											○	○	○	×	

【凡例】○：経験あり、△：他人の経験を見聞きた、×：経験なし

表-5 古太田川における行為の概要

行為名	行為の概要
飲料	この行為は1人のみが語っていた。この世帯の井戸水の水質が悪く、飲料として適さなかったため、川の水を飲んでた可能性がある。
米をとぐ	川がきれいだったころの行為として語られた。60年以上前に行われてきたと推察される。
身支度	70年ほど前まで、歯を磨く、顔を洗うなどの身支度を川で行っていた。
洗濯	60年ほど前まで、川で洗濯をしていたと推察される。古太田川では比較的綺麗なものを洗い、集落内の他の水路で汚れ物を洗うという使い分けがされていた。
水汲み	主に風呂を沸かすために川から水を汲んでいた。この行為は60代までが経験し、かつ自身の体験として多くの発言が得られた。水汲みは子どもの仕事であり、回答者の大半が経験したことがあるため、多く言及されたのだと考えられる。
泳ぐ	60代以上の住民の大半が言及していたのに対し、50代以下では経験したことがない人がほとんどであった。これは、かつて下興野集落開発センターの前の場所が学校指定の遊泳場となっていたが、1969年の佐々木小学校のプール完成に伴い、川で泳ぐ機会が減少したためと推察される。
鍋や釜を洗う	集落仕事の「味噌煮釜洗い」にも見られるように、鍋や釜をカワドで洗うということが頻繁に行われていた。かつては囲炉裏を利用していたため、鍋や釜にすすが付くので定期的に川で洗っていた。
いかだをつくる	60代以下の若い世代を中心としてこの行為が経験された。
魚を捕る	ほぼ全ての世代で言及された。捕れる魚類は時代によって異なり、1960年代以前はオイカワやヒゴロ、フナ、ヤツメウナギ、カワエビ、ザリガニなどが捕れ、捕れた魚は家の囲炉裏で焼いて食べることがあった。1970年代以降はザリガニやイトヨ、フナ、タナゴなどが捕れた。
野菜を洗う	現在でも、自分の畑で獲れた野菜の泥を簡単に落とすため、野菜を洗うという行為が行われている。
農機具を洗う	現在でも行われており、農作業で使用し泥のついた鎌などをカワドで洗っている。
除雪	近年の水辺空間の利用として言及された。特に40代以下の若い世代で、古太田川は除雪ができて便利だと認識されている。

また、対象地では、年中行事「水神様」の認知度は高く、約9割の世帯が水神様を認知していた。しかし、現在でも実施している世帯は1世帯のみとなっており、50年ほど前から各世帯で徐々に「水神様」が実施されなくなっていくことが明らかになった。

(4) 現地調査の結果

現在でも下興野集落で実施されている集落仕事「江浚い」と年中行事「水神様」の実態を、2023年7月30日、12月15日にそれぞれ実施した現地調査から明らかにする。

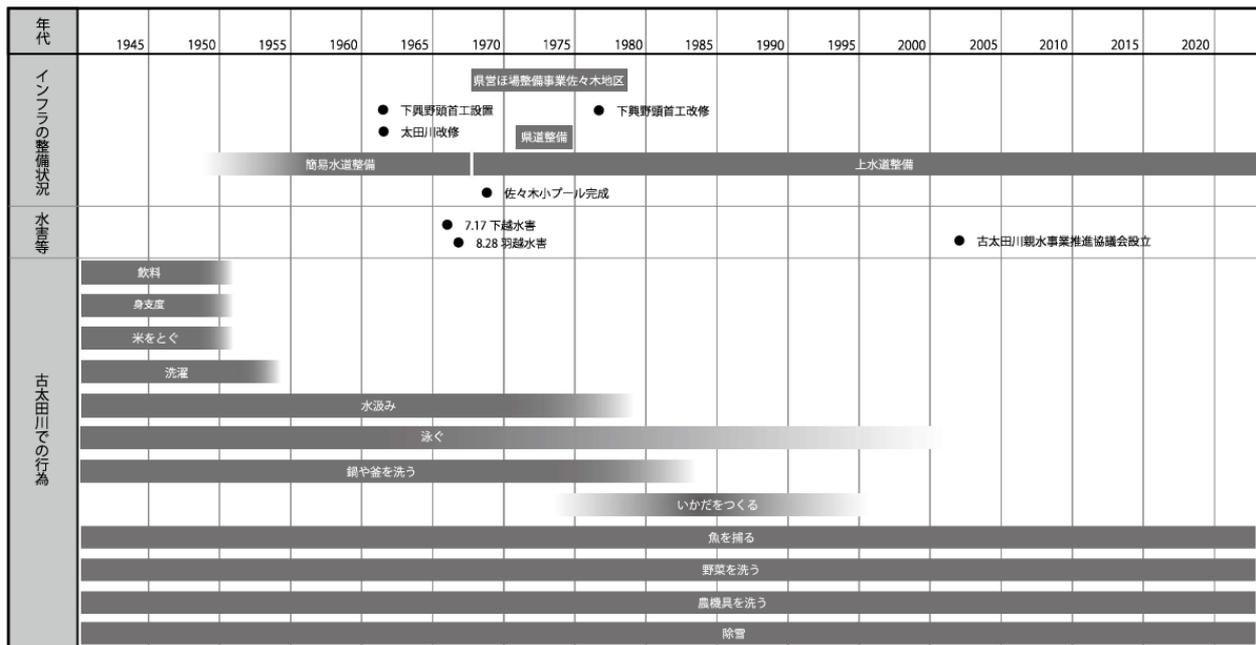


図-4 対象地域におけるインフラ整備と古太田川の行為の変遷

a) 江浚い

江浚いとは、古太田川の維持管理の一環として、古太田川や親水公園の水草刈りや水辺空間の樹木の伐採などを行う集落仕事である。下興野集落では、2023年7月30日に実施され、原則各世帯から家長が参加した。高齢のため体力が持たないなどの事情により、妻や息子が代わって参加するという例外もある。

b) 水神様

毎年12月15日の夕方ごろに行われる年中行事である。現在でも下興野集落に水神様を実施している世帯がある。そこでは、大根の胡麻和え、豆腐汁、炊き込みご飯を椿の葉の上に盛り、ろうそくと共にカワドに供えた後、古太田川に御神酒を注ぎ、ししゃもを流す。その後、自宅に戻りお供え物と同じ料理を家族で食べる。かつては水難事故に遭わないように、また水が使えることに感謝して祈願していた。

(5) 水辺空間の利用の変遷

古太田川で行われてきた行為の変遷を、対象地周辺のインフラ整備とともに時系列で整理した(図-4)。

1960年代以前は、古太田川は飲料水や食材の洗浄など生活用水として幅広く利用され、川で泳ぐ、魚を捕るなど遊びとしても活用されていたが、1960年代後半にインフラの整備が進み、徐々に生活用水としての利用が減少した一方、その後もいかだをつくる、魚を捕るなど遊ぶ空間として利用されていたこ

とが明らかになった。

4. 住民の「語り」からみる水辺空間と住民の関係

(1) 住民の川への認識に関する発言の特徴

住民が、古太田川に対してどのような認識を抱いているのかを明らかにすることを目的として、インタビュー調査によって得られた23名の発言データから該当する発言を抽出した。

結果として、「ものすごい綺麗だったんですよ。」(No.1)「田んぼの水を通すだけでなく、生活にも使っている大事な水だった。」(No.3)など、70代以上の世代はかつての川は生活に必要な不可欠な存在だとして好印象を抱くことが明らかになった。一方、現在の川に対しては「だんだん水質が悪くなって」(No.3)「今なんかさ、日常生活じゃとてもじゃねえが(川の水は使えない)」(No.10)のように悪印象を抱いていた。

60代以下の世代は、「あんまりそれ(川に)執着ねえ。何とも思わねえんだよな。」(No.9)「川なんか、月に一回見るか見ないくらい。」(No.13)という発言が得られ、川に対して無関心な様子が見られた。

(2) コーディングの手続き

住民の水利用施設に関する発言の傾向を明らかにすることを目的として、前述のインタビュー調査のうち、井戸とカワドについての発言を得られたNo.3, 8, 9, 10, 11, 17, 22, 23の8名の発言データを用いてコーディングを行った。

コーディングの際は、テーマ中心の質的テキスト分析の方法¹²⁾に則り、住民が語った内容の要素毎にラベルをつけ、そのラベルをもとに、帰納的にカテゴリーを生成した。

(3) カワドと井戸に関する発言の特徴

井戸とカワドに関する発言データのそれぞれについて、カテゴリー別に分類し単純集計した結果を図-5に示す。

井戸に関する発言では、「井戸」や「井戸水」といった「物」に関する発言の占める割合が大きいことが特徴である。井戸水は、かつて各家庭で水を漉して飲み水として利用されており、簡易水道の水源としても活用されていたという背景から、住民が井戸を、水を利用する物として認識していたことが明らかになった。

一方でカワドに関する発言では、「経験」というメインカテゴリーが発言全体の約7割を占めていることが特徴である。「経験」のメインカテゴリーの中でも、「自分の経験」と「集団の経験」が多く語られた。

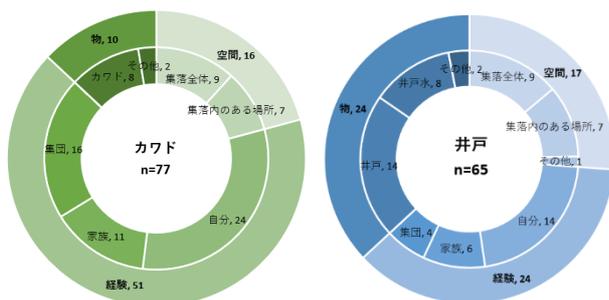


図-5 カワドと井戸に関する発言の対象

5. 結論と今後の展望

本研究では、住民の「行為」という観点から、地域住民に対するアンケート調査とインタビュー調査、現地調査によって水辺空間における行為の実態と変遷を把握した(3章)。また、住民の「認識」という観点から、インタビュー調査で得られた発言データを用いてテキスト分析を行い、住民の川への認識が低下し、さらにカワドという水利用施設に関して、集団の経験について多く語られるという特徴を明らかにした(4章)。

カワドは、井戸のように住居を中心とした私的な空間ではなく、古太田川という他者と共有される空間に存在する。それゆえ、カワドで行われる行為は他者から認識されやすく、「集団の経験」が多く語られたと考えられる。

また、70代以上の住民は、かつての古太田川に対しては好印象を抱き、現在の川に対して悪印象を抱くが、60代以下の住民は、川に対して無関心であることが明らかになったが、このような世代間による川への認識の違いは、古太田川的生活用水としての役割が喪失し、水辺空間を利用する経験自体が減少したからだと推察される。このように、水辺空間における行為が川に対する認識の深化を醸成することが示唆された。

今後は、カワドの公共的な空間を持つという特徴を生かし、カワドを、かつての生活用水として川水を利用するという施設から地域住民とともに新たな文脈のもとに位置付ける必要があると考える。

<参考文献>

- 1) 木岡伸夫：風景の論理：沈黙から語りへ、世界思想社、2007.
- 2) 長澤歩、桐原涼、小澤広直、佐々木葉：新潟県福島潟周辺地域の水路網および集落の変遷と特徴、土木計画学研究・講演集、Vol.66、2022.
- 3) 沢一馬、山口敬太、久保田善明、川崎雅史：水郷集落における文化的景観の持続性—伊庭における水路網の復元と水利用の変容—、土木学会論文集 D1 (景観・デザイン)、Vol.69, No.1, pp.42-53, 2013.
- 4) 立川あゆ、橋本剛、栗原広佑、伊藤梨沙：生業の変化と気候への適応により形成された中山間地域の集落景観、第41回人間—生活環境系シンポジウム報告集、pp.111-114, 2017.
- 5) 山口知恵、松本将一郎、西山徳明：小鹿田焼の里皿山における伝統的な生業の持続と文化的景観の保全に関する研究、日本建築学会計画系論文集、Vol.74, No.644, pp.2215-2222, 2009.
- 6) 新発田市議会：陳情第2号 憩いの川辺親水歴史川遺構の保存に関する(求める)陳情書、2022.
- 7) 佐々木中学校歴史研究部：佐々木村郷土史、佐々木中学校歴史研究部、1977.
- 8) 新発田市史編纂委員会：新発田市史資料第5巻民俗(上)、新発田市史刊行事務局、1972.
- 9) 新発田市：住民基本台帳人口、世帯数、2023年11月現在
- 10) 総務省統計局：国勢調査(1995年-2020年)小地域集計・男女別人口及び世帯数-町丁・字等
- 11) 総務省統計局：国勢調査(1995年-2020年)小地域集計・産業(大分類)、男女別15歳以上就業者数-町丁・字等
- 12) Kuckartz, U.著・佐藤郁哉(訳)：質的テキスト分析法—基本原理・分析技法・ソフトウェア、pp.98-123, 新曜社、2018.